

Ⅳ. 「土器の用途」

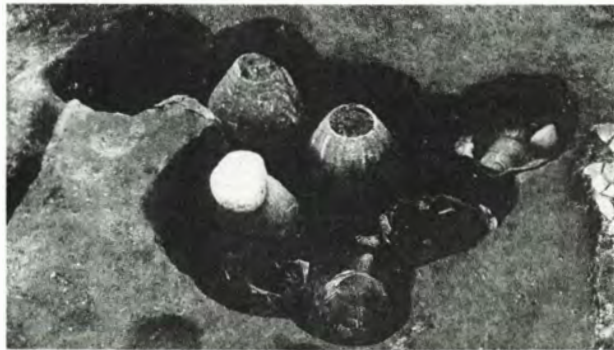
縄文土器の重要な使い方の一つに、食物を入れて煮るといふ方法があります。物を煮るといふ効用を私達は取立てて考えはしませんが、たとえば、山菜や木の実などのアクやエグミの強いものは生では食べられません。そこで土器が活躍したのです。また、肉も焼くだけよりは、植物質食物と一緒に煮込むなどの調理の方法が加われば、互いの味が引き出されて料理のレパートリーも広がったことでしょう。

このように土器が作られて、煮炊きがはじめられたことにより初めて、これまで食べられなかったものが食料となりました。この他、土器は食べ物を盛りつける容器や、保存用の入れ物などとしてさまざまな用途に使われました。

形の移り変わりをしてみると縄文時代前期までは、食料を煮炊きしたり盛ったりするだけの容器（深鉢）が大半でしたが、中期後半から後・晩期になると、注ぎ口のある土器、香炉形土器、植物の実や種を入れる小型壺など、用途に応じたいろいろな形のもので作りだされるようになりました。

一方、土器にも寿命がありました。大切に使用してもひびが入って割れてしまうこともあったでしょう。縄文人はこのような土器に手を加えて再び利用しました。閉炉裏の火床に敷き詰めてみたり、死んだ人を埋葬する棺などにも転用しました。また、土器片に手を加えて丸や三角に仕上げものも見つかっています。実際何に使われたかは解りませんが、重りやまじない用と考えられています。このような土器の再利用を行った縄文人の知恵も見逃せないところです。

土器の最後に行き着く所は「捨て場」と呼ばれるところで。その場所は人の住まなくなった堅穴住居跡の窪地だったり、またはムラ周辺の谷や斜面だったりときまぎまですが、場所を決めて捨てていた様子は明らかです。



山形市熊ノ前遺跡・埋葬に使った土器（縄文中期）

◆主な展示資料◆

- | | | |
|--------------|-----------|----------------------|
| 1. 隆起線文土器 | 日向洞穴・草創期 | (高島町教育委員会) |
| 2. 負殻腹縁文土器 | 清水北C遺跡・早期 | (米沢市教育委員会) |
| 3. 負殻条痕文土器 | 月ノ木B遺跡・早期 | (山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館) |
| 4. 表裏縄文土器 | 赤石遺跡・早期 | (山形県立博物館) |
| 5. 彩漆土器 | 押出遺跡・前期 | (山形県立博物館:複製) |
| 6. 金魚鉢形土器 | 吹浦遺跡・前期 | (到道博物館) |
| 7. 木目状捺系文土器 | 吹浦遺跡・前期 | (山形県埋蔵文化財センター) |
| 8. 羽状縄文土器 | 吹浦遺跡・前期 | (山形県埋蔵文化財センター) |
| 9. S字状捺系文土器 | 吹浦遺跡・前期 | (山形県埋蔵文化財センター) |
| 10. 捺系圧痕文土器 | 水木田遺跡・中期 | (山形県埋蔵文化財センター) |
| 11. 無文土器 | 水木田遺跡・中期 | (山形県埋蔵文化財センター) |
| 12. 渦巻文土器 | 古道遺跡・中期 | (山形県立博物館) |
| 13. 甕棺土器 | 熊ノ前遺跡・中期 | (山形県立博物館) |
| 14. 磨消縄文土器 | 渡戸遺跡・後期 | (山形県埋蔵文化財センター) |
| 15. 内面文様付土器 | 渡戸遺跡・後期 | (山形県埋蔵文化財センター) |
| 16. 波濤文土器 | 渡戸遺跡・後期 | (山形県埋蔵文化財センター) |
| 17. 小型壺形土器 | 渡戸遺跡・後期 | (山形県埋蔵文化財センター) |
| 18. 円盤状土製品 | 渡戸遺跡・後期 | (山形県埋蔵文化財センター) |
| 19. 台付皿形土器 | 作野遺跡・晩期 | (山形県埋蔵文化財センター) |
| 20. 粗製土器 | 作野遺跡・晩期 | (山形県埋蔵文化財センター) |
| 21. 香炉形土器 | 宮の前遺跡・晩期 | (山形県埋蔵文化財センター) |
| 22. 注口土器 | 宮の前遺跡・晩期 | (山形県埋蔵文化財センター) |
| 23. 山内清男関係資料 | | (佐々木洋治氏) |

◆展示協力者・機関◆

佐々木洋治氏（高島町）
（財）山形県埋蔵文化財センター
山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館
米沢市教育委員会 高島町教育委員会 致道博物館

企画展

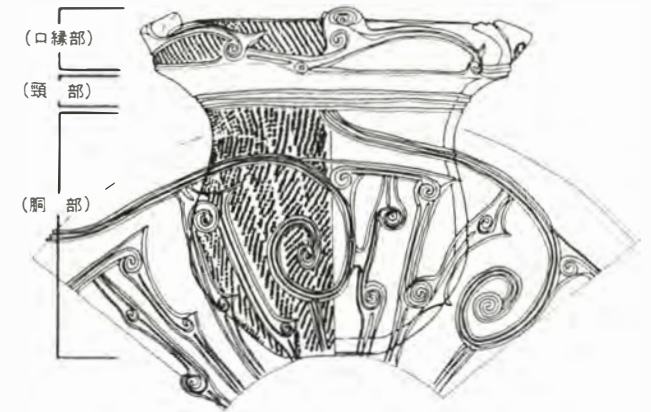
縄文土器の一生

— その技術をさぐる —

平成9年4月19日(土)～6月15日(日)

主催：山形県立博物館

〒990 山形市霞城町1-8 TEL 0236-45-1111



村山市古道跡の土器（縄文中期）

開催にあたって

ものを煮たり保存するための容器“土器の誕生”は人類発展の基となる一つの画期的な出来事でした。食材のひろがりや、煮炊きすることによる殺菌、アク抜きへの応用など、その効用は計り知れないものがあつたと思われまふ。

今回の企画展は、縄文人の生活必需品であつた縄文土器を取り上げ、どのような生い立ちを経て地中に埋もれていったかを考えようとするものです。

土器が素材の粘土から形を成し、使用され、ついには不要となつて捨てられるまでの道のりは、生き物の一生にもたとえることができるでしょう。

県内から出土した縄文土器の形や文様の特徴、土器を作り使用した人々の技術や知恵について少しでも理解を深めていただければ幸いに存じます。

なお、本展の開催にあつて、貴重な資料の出品を快諾くださった関係機関各位およびご協力をいただいた方々に厚くお礼を申し上げます。

館長 奥山 元

◆ 展 示 解 説 ◆

I. 「縄文土器とは」

縄文土器は今から約13,000年ほど前に出現し、約2,400年前ころまで使われ続けたと考えられます。この間、約1万年におよぶ時間の中で、地域や時期によってさまざまな器形や文様を持つ土器が生みだされました。

これらは長年の研究から、現在では地域毎・時期毎の様子が明らかにされ縄文時代のタイムスケール（時期区分）として以下のように位置付けられます。すなわち、草創期・早期・前期・後期・晩期という縄文時代の6区分です。

草創期	約13,000～10,000年前	中期	約5,000～4,000年前
早期	約10,000～6,000年前	後期	約4,000～3,000年前
前期	約6,000～5,000年前	晩期	約3,000～2,400年前



村山市宮の前遺跡・いろいろな形の土器（縄文晩期）

II. 「土器の製作」

ほとんどの土器は、粘土を舂のように細長くして一段ずつ積んでいく「輪積手法」によって作られています。粘土を積むごとにその継ぎ目をなで消して平滑にしながら形を整えていくのです。ときには、粘土紐に刻みを入れて、継ぎ目を強くしようとしたものも見つかります。

土器の底には、敷物として用いられた縄物や木の葉などの圧痕が見られます。これは製作途中の土器を回転しやすくして粘土紐を積んだり、文様を描いたりするための工夫です。

土器の焼き方は、多少掘り窪めた簡単な施設で焼く、いわゆる「野焼」の方法です。約600～900℃の温度で焼かれ、酸素を多く取り入れているためか、焼き上がったときは赤褐色や茶褐色になるのが一般的です。

III. 「土器の文様」

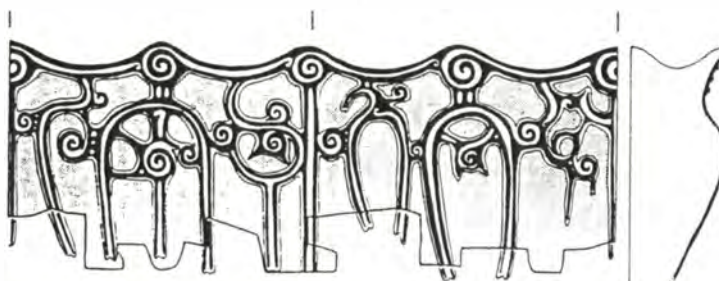
土器の文様は、さまざまな工具によって付けられています。縄文土器の名前の由来ともなる縄目文様は、植物の繊維を撚り合わせた縄紐（縄文原体）を転がしながら押し付けた文様です。右撚りや左撚りの組み合わせ、あるいは棒に縄紐を巻付けてできるいろいろな縄目文様が見られます。

縄目以外では、細竹のような管状のもの、手を加えた棒・貝殻・人の指などのようなより身近なものを使って文様が付けられました。

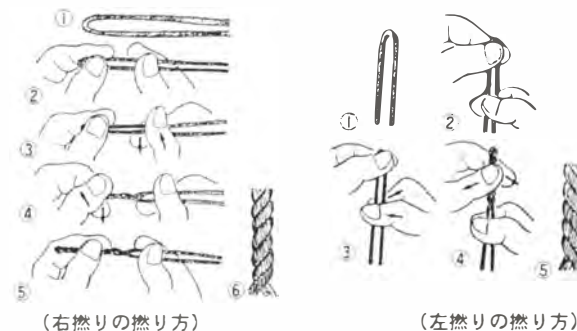
細竹は輪切りにすると円形になり、縦に割って引くと平行な線、丸い背の部分で押し引くと連続した爪形文様が描き出されます。

貝殻は、たとえばハイ貝という種類の貝の縁を粘土に押し付けて引くと細い十数本の平行な線が得られます。また、その縁を直角に当てれば鋸歯状の文様ともなるのです。

一方、縄目文様だけのもの、奇麗に撫でたり磨いたりして無文とするものなどもあり、それぞれ土器の用途に合わせて文様が描かれていたと考えられます。土器の文様は一見すると不規則にも見えますが、全体をよく見ると規則性もっていることも解ります。たとえば、縄文時代中期には列島中に渦巻文様が流行しました。また、文様が偶数だったり、奇数単位で付けられていたりしています。このように時期や地域によっていろいろな違いや共通性が認められるのも縄文土器の特徴です。



山形市熊ノ前遺跡出土土器（展開写真）



《縄紐の撚り方》

縄文（縄目文様）は、撚り合わせた紐を粘土に転がしてできる文様です。この文様の基となる撚り紐を考古学では「縄文原体」と呼んでいます。材料は植物の茎や木の皮などの繊維です。ときには動物の腱なども使われたかもしれません。

長さは、土器に文様を付けるのに都合のよい、人差指の第一関節の長さから第三関節くらいまでのものが多いようです。センチメートルに直せば2・3cm～6・7cmほどとなるでしょうか。

撚り紐を作るには、まず材料の繊維に撚り（ねじり）を加えることから始まります。その要領はタオルを絞るように両端をそれぞれ逆方向にねじるのです。その時のねじり方によって、二通りの異なった撚り紐ができあがります。

一つは時計回りを示す「右撚り」と呼ぶ縄と、もう一つの前のものとは逆になる左撚りと呼ばれる二種類の原体です。

次にこれを二本組み合わせて撚ってできる縄を1段目の縄と呼んでいます（上図の右と左）。さらに、これを折り返して自然な撚りを加えると、だれもがよく見る縄文の原体が復元できるのです。

《山形市熊ノ前遺跡の土器》

県庁前にある熊ノ前遺跡から埋壙といわれるほとんど壊れていない大形の土器がまともに見つかりました。

この土器の文様は縄文時代中期の代表的な渦巻文と呼ばれるものです。口縁部に四つの渦巻文、2本の縦線で区画される体部には2単位の「n」字状文と付随する「つ」の字状の文様がおさめられ、これら文様が偶数で付けられていることが解ります。